

岡山県立美術館開館20周年特別企画 「名品とともに楽しむ表装の美」

平成20年 2月26日[火]～3月23日[日] 月曜休館

表装とは、書画を鑑賞や保存のため、掛物、巻物、額、屏風、帖などに仕立てることをいい、一般には日本・東洋の伝統的な作品に対して行われるものです。雪舟や宮本武蔵・浦上玉堂といった岡山ゆかりの作家の作品を収集展示する当館では、文化財を甦らせる修復作業を推進する観点から、表装に力を注いできました。

本展では、永年文化財修復に携わり、当館所蔵品はもちろんのこと、全国各地の国宝や重要文化財指定品を含め、多数の書画を扱ってきた京表具師山内啓左氏が表装を手掛けた名品を展示いたします。そこには奈良時代から現代まで、さまざまな分野の絵画や書跡・文書、そして日本だけではなく中国・朝鮮からの渡来品も含まれています。約40件の展観ですが、作品の優れた内容を鑑賞するとともに、表具との取り合わせの妙を存分にお楽しみくださればと願う次第です。あわせて、表装の素材や作業工程等も紹介いたします。

■関連行事

- ①美術の夕べ「表装の美をみる」
2月29日[金] 18:00～19:00
②美術館講座「書画の形式と構造」
3月1日[土] 14:00～15:30
③対談「表装のことあれこれ」
3月9日[日] 14:00～15:30
山内啓左（京表具師）氏 + 当館学芸員
④ワークショップ「書画取り扱い指南」
3月9日[日] 10:00～12:00
講師 当館学芸員

■主な出品作品（◎国宝 ◎重要文化財）

- ◎ 正倉院文書（写経奉請状） 1幅 静岡県立美術館
◎ 日本書紀 2帖 来迎院
◎ 継色紙（あまつかぜ） 1幅 逸翁美術館
◎ 廬山図 玉洞 1幅 岡山県立美術館
老子図 牧谿 1幅 岡山県立美術館
◎ 十六羅漢像 2幅 称名寺
◎ 山水図（傲玉洞） 雪舟 1幅 岡山県立美術館
夕茜 小野竹齋 額1面 岡山県立美術館
*特別出品 金色不動明王像(黄不動)旧表装製 園城寺

《山水図（傲玉洞）》 雪舟
重要文化財

最新刊行物

『坂田一男展』カタログ

(2007.9.28刊行 2,100円)



展覧会

- 11月15日[木]～12月2日[日]
第54回 日本伝統工芸展岡山展
12月15日[土]～24日[月]
第67回 国際写真サロン入選作品展
1月16日[水]～2月24日[日]
人間国宝 荒川豊蔵
2月26日[火]～3月23日[日]
特別企画「名品とともに楽しむ表装の美」

社会人のための美術の夕べ

- 12月21日[金] 「岡山の美術をみる－日本画編①－」
＜中村＞
■1月25日[金] 「荒川豊蔵展をみる」
＜福富＞
■2月29日[金] 「表装の美をみる」
＜守安＞
■3月28日[金] 「岡山の美術をみる－日本画編②－」
＜山吹＞

■特別観覧料が必要です ■「岡山の美術」(常設展)観覧料が必要です
時間 18:00-19:00 会場 当館 展示室 < > … 担当学芸員

美術館講座

事前申込み不要（聴講無料、先着順）

- ◆1月12日[土] 「方谷さん、良寛さん」
講師：渡辺道夫（副館長）
◆1月19日[土] 「荒川豊蔵 志野にかけた半生」
講師：正村美里（岐阜県美術館学芸員）
◆2月16日[土] 「画像としての『桃太郎』」
講師：中村麻里子（主任学芸員）
◆3月1日[土] 「書画の形式と構造」
講師：守安収（参与 / 学芸課長）

時間 14:00-15:30 会場 ◆地下1階講義室（定員70名）
開場は13:30 ◆2階ホール（定員210名）

美術館ニュース 79号

発行：2007年12月

発行者：岡山県立美術館
〒700-0814 岡山市天神町8-48
TEL 086-225-4800
URL http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/index.html
E-mail kenbi@pref.okayama.lg.jp

特別展のお知らせ

遠友再来『人間国宝 荒川豊蔵』

荒川豊蔵（明治27年～昭和60年）は、岐阜県多治見市出身で、京都の宮永東山窯、鎌倉の北大路魯山人の星岡窯で、工場長やマネージメントを務めました。昭和5年、「魯山人陶磁器展覧」を名古屋で開催した折、豊蔵は、可見市久々大萱の古窯跡で小さな志野の陶片を発見しました。この発見は、それまで瀬戸で焼かれたとされていた黄瀬戸、志野、瀬戸黒、織部といった桃山時代のやきものが美濃で作られたことを証明する大きな出来事でした。3年後、豊蔵は、大萱に窯を築き、古陶磁を研究し、古窯跡と陶片を頼りに美濃焼の再興を目指しました。試行錯誤を続け、昭和28年には見事な志野を完成させました。そして昭和30年、「志野」と「瀬戸黒」、ふたつの技法で重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定され、美濃焼を代表する陶芸家となりました。

本展は、豊蔵が範とした古陶磁の名品や陶片と、荒川志野の変遷をたどる作品、豊蔵が手がけた黄瀬戸、瀬戸黒、染付、色絵に加え、備前や信楽、萩、唐津など他窯での仕事、書画や共作など約200点を展覧し、豊蔵の足跡を回顧します。

合わせて、岡山で交流のあった備前の金重陶陽や陶磁研究家の小山富士夫ら、ゆかりの作品も紹介します。

平成20年
1月16日[水]～2月24日[日]

(荒川豊蔵) 黄瀬戸竹花入 愛知県陶磁資料館蔵



(荒川豊蔵) 志野水指 個人蔵



(古陶) 志野菊絵茶碗 銘玉川 徳川美術館蔵

関連事業

・着物で美術館へGO!

特典：会期中、和服でご来館の方は団体料金でご覧いただけます。

・企画担当学芸員のお話

日時：平成20年1月19日[土] 14:00～
講師：正村美里氏（岐阜県美術館学芸員）
演題：荒川豊蔵 志野にかけた半生

・美術の夕べ「荒川豊蔵展をみる」 要観覧券

日時：平成20年1月25日[金] 18:00～19:00
講師：福富幸（当館学芸員）

・記念講演会とギャラリートーク 要観覧券

日時：平成20年2月11日[月・祝] 14:00～
講師：竹内順一氏（東京芸術大学教授・茨城県陶芸美術館館長）

・ワークショップ「お茶に親しむ」 初心者歓迎

荒川豊蔵の作品は茶碗をはじめ、水指や花入などお茶に関係する作品がたくさんあります。ワークショップを通じて、お茶や茶道具に親しんでほしいと思います。
日時：平成20年1月20日[日]・2月3日[日]
10:00～12:00（予定）

定員：各30名（小学生以上）（申し込み先着順）
参加費：小中学生500円／高生及び65歳以上900円／一般1300円（お茶、お菓子代、展覧会観覧料を含む）
講師：岡山県茶道連盟 龍門功氏ほか

※参加については、県立美術館までお問い合わせください。



編集後記

先日、県内高校生が描いたポスターを審査するために県警を訪れ、審査終了後関係者と話をする機会をもった。「美術館は全く縁のない場所」と言い切る人がいるかと思えば、坂田一男展に子ども連れで足を運んだという人もいた。その人は今夏に当館で開催したピカソ展にも来てくれたらしい。そして「坂田一男の作品を見たことで、ピカソの絵を理解できるようになった」と続けた。入場者数が伸び悩んだ坂田一男展であるが、入場者の中には素晴らしい発見をして帰る人もいるのだなと、感動を覚えたひとときであった。 [Y. T.]

人物がカーテンから手を伸ばしている。向こう側にいる誰かに呼びかけているのだろうか。カーテンの間に山なみが見られることから、ここはテラスなのだろう。暖かな光がやさしく降りそそいでいる。切り取られた時間の中、様々なことを想像させ、飽くことのない時間を与えてくれる作品である。カーテンをはじめとした随所に見られる人為的に施した風化や、落ち着いた色合いの画面は、懐かしさや普遍性を感じさせる。これらは、大学時代にヨーロッパ旅行で見たフレスコ画、京都・

有元利夫（一九八〇年）

「会話」（混合技法、キャンバス）

奈良に通い研究した仏像・仏画といった両洋の古典美術の影響を受けた、有元独自のものである。有元利夫（一九四六―一九八五）は、疎開先の岡山県津山市生まれ。東京藝術大学美術学部デザイン学科卒業後、広尾民理店に就職し、会社勤めをしながら創作活動を行っていたが、三年後に退社、画業に専念した。一九七八年、安井賞特別賞受賞。一九八一年、安井賞受賞。【学芸員 細田樹里】

鍵岡館長の美術体験の記

喫茶店「エル・グレコ」に久しぶりに入った。大原美術館に隣接する、画家エル・グレコの名前をつけた喫茶店である。久しぶりどころか、実に40年ぶりだろうか。

僕が生まれて初めて西洋絵画作品の本物に触れたのは忘れもしない、昭和29（1954）年であった。数えてみれば11歳である。その年の冬、京都市立美術館で「フランス美術」展が開催された。小学校の図画の先生が数人の同級生を引率して、奈良の田舎町から連れだしてくれた。ルーブル美術館の作品を中心にしてのフランス美術展で、ヨーロッパの絵画を一望できた。これが本場の本物の絵画なのだと感激した筈なのだが、むしろ絵画とはなんて自由なのだと感じた。なかでも、ポナールとゴッホに盛んに感心した。帰りがけ、銀表紙の図録を買ったことも覚えている。

もっと沢山のヨーロッパの絵画をみたいし、ヨーロッパへも行きたいという憧れが芽ばえた。先生は日本でも西洋美術がみられるところがある。それは倉敷にある大原美術館ということだと教えてくれた。確か奈良高校に入った年だったと記憶があるが、親に小遣をせびり1人で倉敷まで旅をした。白壁の町並にあるギリシャ風建築とブロンズ彫刻に迎えられ、エントランスを入ると、西洋近代の絵画がずらりと並んでいた。久しぶりに本物の絵画に出会えたんだと生意気にも思い見入っていた。すると突然のようにエル・グレコの絵画に出食わし、目が放せなくなった。内から光が輝きだすような、内から力が湧きでてくるような、不思議なものが画面から放たれていた。天にむかい上昇す

る“憧れ”というのだろうか、驚嘆の体験であった。（和泉式部の和歌「もの思へば沢のほたるもわが身よりあこがれ出る玉かとぞ見ると、今は思う）

あれ以来、エル・グレコの作品は欧米の美術館や美術展でもみた。エル・グレコの聖地であるトレドへも行き、町に魅惑され、エル・グレコの多くの作品にも接し満喫した。美術の知識や宗教画の知識も少しは得た。しかしながら、あの大原美術館でのエル・グレコ体験とは異質であると思われてならない。

「最初に接した時の驚嘆、あの驚嘆を再びすることが出来るなら、私はどんなことでも犠牲にする」と岡倉天心は語っている。そうなのだ、初めての驚嘆すべき絵画との出会いこそが、美術がもっている芸術体験なのだと思う。

エル・グレコ（受胎告知）が表紙になっている大原美術館所蔵目録という薄い冊子だったと記憶しているが、それを買い帰り路、エル・グレコの名前にひかれて喫茶店に入った。室内は暗かったが、若い僕の胸はエル・グレコ熱に火照っていた。倉敷駅から山陽本線の列車に乗車すると、車窓から夕日に照らされた曼珠沙華が、あぜ道に赫々と燃えていた。（次号につづく）

【館長 鍵岡正謹】



エル・グレコ 《受胎告知》 大原美術館蔵

寄贈作品のご紹介
当館では、今年も優れた作品を寄贈していただく機会に恵まれました。そのうちの数点を本号と次号で紹介いたします。

高橋秋華筆《海金剛図屏風》《雁来紅蝶図》

本年度、当館では高橋秋華(1877-1933) 作品2点の寄贈を受けた。1点は2007年7月19日～8月20日に開催された常設展特別陳列「郷土ゆかりの日本画家・高橋秋華」に出品された《海金剛図屏風》(図版①)で、もう1点《雁来紅蝶図》(図版②)はその会期のちに、篤志家から寄贈いただいた。

高橋秋華は、現在の岡山市西大寺に生まれた。はじめ石井金陵に南画を学び、後に都路華香、ついで山元春挙に師事する。明治36年(1903)第5回内国勲業博覧会の出品作《幹信》が褒状を受け、38年の日露戦捷博覧会には《獲物》が一等賞金牌を受賞する。44年の第5回文展には《春日野》が初入選、以後入選を重ねる。昭和5年(1930)に完成した明治神宮聖徳記念絵画館の壁画《御降誕之図》は、皇后陛下からの拜命を受けて制作・奉納した代表作である。私淑した岡本秋暉の得意とする花鳥画の世界と、師春挙のモダンで色彩豊かな画風とに強く影響を受け、清雅で格調高い画風を持ち味とする。

作品①は、《外金剛図》《海金剛図》《2曲屏風1双のうち1隻》である。金剛山は古来より朝鮮第一の名山と称えら



①《海金剛図屏風》



②《雁来紅蝶図》

れる山。標高1638mの毘盧峰の聳える中央連峰を境として西側を内金剛、東側を外金剛、東端の海岸部を海金剛と呼ぶ。奇岩怪石が連なる山々や美しい渓谷を堪能できるこの地は、多くの文人画人によって取りあげられた。《外金剛図》が高く険しい峰々を仰視して描いているのに対し、この《海金剛図》は高い位置から俯瞰して描かれ、2隻は対比的な構図で表されている。本作品は昭和15年に発行された『秋華画観』（全29作品の図版及び筆塚の写真等が収録されている）にも掲載されており、秋華の自信作であったと思われる。潤いのある墨の濃淡と丁寧な筆遣いで、切り立つ断崖や穏やかな波の動き、空気の層や遠近感など情趣豊かに描き込まれている。

作品②は葉鶏頭に黒揚羽蝶が配され、葉の1枚1枚を丁寧に観察して描いている。色彩も豊かで小品ながら充実した画面となっている。花鳥画の得意な秋華は牡丹を多く描いているが、葉鶏頭を描いた作品は他に見あたらす、その意味でも貴重であると言えよう。

当館にはこれまで高橋秋華作品は寄託作品のみであったが、この2点は貴重な所蔵作品となった。

【主任学芸員 中村麻里子】

芹沢銈介作《法然上人絵伝》

2007年1月5日～28日、当館では特別展「棟方志功と芹沢銈介」を開催した。展覧会の会期中、県内の方から一本のお電話があった。それは「芹沢銈介作の《法然上人絵伝》を所蔵している。より多くの方に見ていただくために寄贈したい。」というものであった。その後幾度かその方のお宅を訪問する機会を得て、作品は今夏当館に寄贈された。

芹沢銈介（1895-1984）は静岡市に生まれ、東京高等工業学校（現東京工業大学）を卒業後郷里に戻るが、柳宗悦（1889-1961）の思想と沖縄の染物である紅型の影響を受け、染色家を志す。柳ら民芸運動の指導者たちとの交流を深めながら、明るく落ち着いた色調と温かな模様の作品で独自の型染を確立した。また、倉敷の大原美術館でも活動するなど岡山とも縁の深い作家である。《法然上人絵伝》は1941年（昭和16）に制作された。寄贈された本作は1977年（昭和52）に雁皮紙に刷られたもので、全3巻から成る。これまで大切に保管されてきたため、作品の保存状態は極めて良好である。

法然上人（1133-1212）は、言わずとも知れた浄土宗の開祖である。平安時代末期から鎌倉時代初期に生きた高僧で、美作国、現在の岡山県久米南町に生まれた。

研究ノート 緑川洋一の写真 ―《台風近し水の子灯台》から考える

去る2005年1月14日から2月20日まで、当館では緑川洋一の初期における業績を、当時親交のあった写真家たちの作品とともに紹介する、特別展『緑川洋一とゆかりの写真家たち 1938-59』を開催した。そして本展覧会開催後も、常設展「岡山の美術」において、緑川洋一記念室のご協力を得ながら、彼のオリジナルプリントを順次ご紹介している。

本年4月20日から8月5日までの間は、《日本列島―海と陸との接点》と題した展示を行った。これは晩年に出版された写真集「水墨の詩 日本の山河」（東方出版、1997）において、緑川が「海と陸との接点」「内陸の山河」「活火山群」の3章に整理していた『日本列島』のシリーズのうち、最初の章に当たるものであり、展示にあたってはここから、1950年代末から80年代にかけて撮影されたと考えられる22点の作品を選んで紹介した。

「海と陸との接点」では、北は北海道から、南は小笠原や八重山の島々に至るまでの、海岸の風景がテーマになっているが、シャープで幾何学的な造形美や、光と影のコントラストを表現の主眼とする一方で、陸地の尖端や海中に灯台が聳える風景を撮影した写真が多いことに気が付く。実際のところ、緑川に与った、灯台は「私の好きな題材」であり、「断崖の山上にあって、青空に映える白亜の灯台、そのがちりとした建造物に妙に心がひかれる」ものであった。また「海中にたつつましい灯台も、まことにロマンで好きだ」とも述べている (1)。そのなかでも《台風近し水の子灯台》(図版参照)は、渡欧直前の頃、月刊誌『サンケイカメラ』に年間にわたって緑川が連載していた口絵「西日本に行く」の掉尾を飾ったもので (2)、灯台のある風景を写した写真のなかでは、早い時期に制作されたものであるが、暗雲垂れ込める空の下に、灯台を戴く絶海の孤島が対峙するというドラマチックなイメージが目目される。

この作品については、緑川自身が制作にあたっての「種明かし」を行っていて、「第一ネガとして海と灯台の写真を印画紙へ引き伸ばし、台風近しを思わせる暗雲を第二ネガから焼きつけたもの」であり、「雲はやや濃い目に焼いた」のだという (3)。この作品に見られる力強い造形性は、2枚の撮影ネガを合成することによって得られたのである。長時間露光を行った《夜の鳴門急潮》(1954)以降の、実験的な風景写真の系譜に連なる作品であると言える。

同時に重要なのが、先の引用箇所で緑川が述べている制作の動機である。これによるとこの作品は、単に造形的な実験を行うためだけに制作されたのではなく、この作品を通じて表現したい、水の子灯台をめぐる物語があったのだという。その内容は、豊後水道が台風で大風となり、水没したかのように思われる灯台の安否を、村人たちは気遣うが、やがて波間から灯台の光が見え、喜びの声を上げたというもので、この話を聞いて興味を抱いた緑川は、水



緑川洋一 《台風近し水の子灯台》 1958 ゼラチンシルバープリント ©緑川洋一記念室

の子灯台を実際に見るべく、船をチャーターしてこの孤島に赴いたのだという (4)。

つまりこの作品では、雄大な風景のなかに屹立する灯台が、構図上の効果的なアクセントになっているのとどまらず、時には厳しい表情を見せる自然に立ち向かう人間の営みの象徴となっているのである。

ちなみに、この《台風近し水の子灯台》が発表された前年の秋（1957年10月1日）に、灯台守夫婦の一代記を描いた映画《喜びも悲しみも幾歳月》(木下恵介監督)が公開され大ヒットしたが、緑川はこの映画をたいへん気に入っており、後年たびたび主題歌を口ずさむほどであったという (5)。言わばこの映画を描く世界にも通じるような、人間愛あふれる物語を表現しようとして緑川が作り上げた風景が、《台風近し水の子灯台》なのである。

先に表現したい物語があって、そのために様々な写真のテクニックを駆使していくという作業の方向性は、谷内六郎が描くメルヘンに憧れて制作した《かえり道》(1955-56)などの作品とも共通するものであるが (6)、これは緑川の写真を考えるにあたって重要なポイントである。つまり緑川が撮影した写真は、写された風景そのものの美しさや、写真上のテクニックの高度さのみに還元されるものではなく、何かの象徴であり得るということである。

このような制作の姿勢が、客観性を旨とするドキュメンタリーと相容れないことは明らかで、渡欧までは盛んに撮影していた、人々の日常生活のスナップを取り止めた原因もここにある。周囲の写真家の動向も見ながら、やがて自らを風景写真家として規定していった緑川は、1960年代以降において人々の生活を直接に主題とすることはなくなった。その代わりに、人々の営みは風景写真において、《台風近し水の子灯台》に見るように、自然景観と共存する人文景観から喚起されることになった。船や筏、田や畑など、灯台のほかにも撮影された様々な農漁業の風景からは、かつて緑川が撮影していた、名もなき人々の素朴な日常の営みを、残響として感じ取ることができるのである。 【学芸員 廣瀬就久】

[[]注[]]（1） 緑川洋一「緑川洋一、“風景40年傑作選”を解説する」、緑川洋一人と作品」（別冊Photo Technic）、1978、玄光社、69頁。（2） 「連載 西日本を行く 11 水の子灯台」、1958年12月号、50-51頁。（3） 緑川「緑川写真術を探る part-1 私の海」、前掲書、107頁。（4） 同左。（5） 緑川洋一長女・西瑞子氏からのご教示による。なおこの映画にも、水/子鳥灯台は登場する。また後年、石津良介と共著で発行した旅行ガイド「ブルーガイドブック31 瀬戸内海」(実業之日本社、1962)の「豊後水道と水の子島」の項(128頁)では、この映画のことが言及されており、緑川がこの映画を公開当時に見ていた可能性が高い。（6） 拙稿「緑川洋一 風景写真家への道」、「緑川洋一とゆかりの写真家たち 1938-59」(展覧会図録)、岡山県立美術館、2005、12-13頁。本稿は筆者が執筆し、会期中(2007年4月20日～8月5日)に展示室で配布した、岡山県立美術館常設展解説パンフレット「緑川洋一の写真 日本列島―海と陸との接点」における内容の一部について、改稿を行ったものである。